コスチューム姿で丹頂の歩行訓練をする飼育員たち。日の出から日没まで1日約12㎞の訓練が毎日繰り返されました。

平成14年3月に岡山県がまとめたタンチョウ将来構想では、将来的に県内4か所で丹頂の野外飼育を行います。倉敷・総社エリアには、下倉から酒津までの高梁川流域が含まれています。

丹頂の学名は、Grus japonensis（グルス・ヤポネンシス）「日本の鶴」という意味です。丹頂の「丹」は、文字通り赤い色を意味し、頭の頂が赤いことに由来しています。赤い頭は鶏でいうトサカにあたり、興奮したり威嚇するときは赤みが増して面積も広がります。背丈は、140～150㎝、体重は7～10㎏。翼を広げると220～240㎝もあり、日本で一番大きな鳥です。丹頂は、瑞鳥〔おめでたい鳥のこと〕として、古来より大切にされてきました。江戸時代までは、幕府による捕獲禁止の御止鳥〔保護制度〕で守られていたため、日本各地で見ることができたようです。岡山県にも冬鳥として渡来していた記録が残っています。しかし、明治以降は、江戸幕府の崩壊と同時に御止鳥も消滅し、銃による乱獲や開発による生息地の湿原の減少などで激減。一時は絶滅したと思われていましたが、大正13年に北海道釧路湿原で10数羽を発見。昭和10年に国の天然記念物に、昭和27年には国の特別天然記念物に指定されました。

岡山後楽園では、江戸時代から丹頂が飼育されてきました。丹頂にゆかりの深い岡山県では、絶滅の危機にある丹頂の種の保存と遺伝的な管理が適切に行えるよう県内で100羽程度の飼育を目指しています。この構想のなかで注目されているのが、そのうちの数十羽を水辺など豊かな自然環境のなかで、最小限の人の関与で野外飼育すること。これは、高梁、旭、吉井川水系と県北に適地を求め、その場所のもつ自然環境の収容力などに十分配慮しながら野外で飼育しようとする試みです。野外飼育をすることが可能かどうかを調べるために行われた野外調査は、市内では、吉備路のほか秦や下倉でも実施されました。

岡山県自然保護センター（佐伯町）は、全国で屈指の49羽の丹頂を飼育するなど、高い飼育技術を有しています。平成15年7月1日、市内にオープンしたきびじつるの里（三須）は、県自然保護センターと連携して血統管理を行い、丹頂の遺伝的多様性を保つためのバックアップ体制の一翼を担っています。きびじつるの里は、備中国分寺から北西に位置する緑豊かな丘陵地を利用し、ツルの保護や繁殖技術の開発と蓄積を目標に掲げています。東側に、国民宿舎サンロード吉備路が隣接し、敷地約3ha内に、大小2つの池、ツルの飼育に適した湿地や緑地、管理棟（つるの家）、研修棟（学びの家）、飼育ケージ〔鳥かご〕を備えています。きびじつるの里にはオープン以来、ハル（11歳）、キリ（4歳）、モミジ（3歳）、キビノ（3歳）のメスの丹頂4羽が飼育されています。

5月31日と6月2日、待望のヒナがここきびじつるの里で誕生しました。ヒナはそれぞれの日に人工ふ化で1羽ずつ誕生しどちらもメス。丹頂の人工ふ化に成功した施設としては、県内で3番目となります。このかわいらしい丹頂姉妹をひと目見ようと、今、きびじつるの里がにぎわっています。

そして、飼育員が丹頂の格好をして、ヒナを育てるコスチューム飼育。そんなちょっと不思議な光景が見られるのも、にぎわう理由の一つでしょうか。丹頂の頭の形に似たくちばしを手に持ち、全身を丹頂と同じように白と黒の衣装で覆って、人間の顔や姿を見せないというのがコスチューム飼育です。この飼育方法は、生まれたばかりのヒナが動くものを親と思い込む「刷り込み現象」を軽減するために考えられたもの。人工ふ化などによって生まれたヒナが、人を親と思い込んだり、人に対して求愛行動をとったりする事例もあったそうです。一度、人を刷り込んだ丹頂同士のつがい化は難しく、世界的に見ても人工ふ化同士のペアでヒナが誕生した例は少数です。コスチューム飼育の実践は、日本では、北海道、岡山県自然保護センターに次いできびじつるの里が3例目となります。

丹頂になった飼育員は、話すことができません。身振り手振りでコミュニケーションをとり、ツルになろうと懸命です。人間扮する親鳥はヒナの子育てに我が子のように愛情を注ぎ込んでいます。そこには、絶滅が心配された丹頂に対する飼育員たちのひたむきな努力がありました。